

五歳児とお話づくり



鈴木正子

はじめに

ゆたかな想像性と探究心、そして自由な創造性にあふれる時代、私は五歳児の行動をみつめる時こんな感じにうたれます。

彼らは四歳児時代よりもはるかに新しい遊びを考えだしたり、また自分の考えや感じたことを言葉や絵やリズムで表現することが良くなるようになります。

私が五歳児とお話づくりを結びつけた動機も実はこんなところからきているのです。彼らのもっているそれらの力を満足させ、また、もっともっと伸ばしてやるために、お話づくりはその土壌とならないものだろうか。

次の記事はこの一年間のお話づくりのあらましで、いろいろな試みた足跡でもあります。ではこれから実践記録の中のごと

ころをとりあげながら書いてみたいとおもいます。

① みんなでお話をつくる

五月二十三日

今日は「五歳児になったら」とかねてから考えていた、みんなでするお話づくりをはじめてみました。

四歳児時代はまだまだグループ意識ももう少しこうした活動に無理があるように思えたので、まず何でも話せるようになることに目標をおき、もっぱら幼児の心を開放することに主力を注いできました。

また、幼児の経験したことや生活の中からヒントを得て、教師自身がお話づくり、それを話して聞かせ、お話をつくることへの興味を育ててきました。

しかし、もうみんな五歳児です。私は子どもたちの成長と共に経験の幅をひろげてみたいと思つたのです。

では幼児たちのようすを記してみましよう。

今日は最初の試みとして、この間から活動の中心になつてい
る花ばたけつくりから誘導してみたいとおもひ、あらかじめ
花をテーマにしたお話をつくっておきました。

朝から熱中していた花ばたけつくりも一段落という頃をみて、
みんなで部屋に集まつた。

T「今日はきれいな花ばたけがたくさんできましたね。みんなの
お仕事をみているうちにこんなお話ができました」

(子どもたちは何だろろうという表情)

T「それは金魚になつたお花というのです」(子どもたちの中か
ら、えー花が金魚になつちゃうなんておかしいよという声)

T「みなさんね、金魚草のお花知ってますか」子どもたち「知っ
てる、知ってる。給食のお部屋のほうに咲いてるお花でしょう」

T「そうね、そのお花のお話です。」

あの幼稚園のお庭に赤い金魚草のお花が咲きました。

ある日のこと幼稚園の子どもがやってきました。子どもが『あ
ら金魚ににてるお花ね』っていいました。金魚草は『あ、だから
私は金魚草っていうんだわ』っておもいました。

それから金魚草は毎日毎日金魚になりたいなつて考えていまし

た。ある日のこと男の子がやってきました。金魚草は『私を金魚
にしてちょうだい』とたのみました。男の子は『お花は金魚にな
れないよ』と行ってしまいました。今度は女の子がやってきました。
金魚草は『あたしを金魚にしてちょうだい』とたのみまし
た。女の子は『してあげたいけれどどうするかわかんないわ』
と行ってしまいました。ある日のこと金魚草のお花はぼとりと落
ちました。でも金魚草は、まだ金魚になりたいなつて考えていま
した。今度はそこに眼鏡をかけた先生が通りかかりました。

(鈴木先生だよというささやきがおこる)

先生は『はい、してあげましよう』といつてお花をひろいました。
そうしてどうしたとおもう？ お花をね、みきちゃんが持つてき
てくれたお玉じゃくしのいる池に入れてあげました。」

(子どもたち「ああ、あの池か」と笑う)

T「お花は池に入るとアプアプしそうになりました。『たすけて
え、たすけてえー』というところとそこに大きなお玉じゃくしが来て、
そうつと押ししてくれました。」

『あら、およげちゃつた』赤い金魚草は、ついついとお玉じゃ
くしに押されていきました。それから毎日お花はお玉じゃくしに
押ししてもらつておよぎました。さあ、先生のお話はここまでなの。
それから金魚草はどうしたとおもう？ 金魚草はお魚になれるか
しら、ここからさきのお話はみんな考えてましよう。考えた人は

だまって手をあげて先生に教えてね」

(子どもたちは急に課題され、とまどいと興味のまぎった顔をしてしばらく無言だったがH君が手をあげる)

T「はいHちゃん」

H「あのねえ、お玉じゃくしが蛙になっちゃったでしょ、外に出て行っちゃった。そうしたらお花またおよげなくなっちゃった」

(H君はややはずかしそう)

T「さあ困った。どうしましょうか」

(M子ちゃんが手をあげる)

T「M子ちゃん」

M子「そうしたらね、お空から、葉っぱがおっこってきてお舟になっちゃった。それでお花のせっちゃった」

(小さい声でいいおわってほっとした表情)

T「よかったのねえ」

(すかさずS君が手をあげる)

S「あのねえ、そこへ男の子がやってきてサクレヨンで目と口をかいてやったんさあ、そうしたらほんとの金魚になっちゃった」

(他の幼児たちは感心したような表情をみせる)(Nがいう)

N「しっぽが無いじゃあないか」

S「しっぽもかいたんさあ、そうしたらおよいじゃったんだよ」

T「ああ良かった。本当にお花が金魚になったわね」

(子どもたち「きゃーほんとだ。いい考えだよ」などと口ぐちにいう。発言の無かった幼児たちも結構関心をもって参加しているらしい。)

T「他のひとは、もつとちがうお話のできるひとは？」

子どもたち「それでいいよ、だって、およげちゃったもんね」

「いい、いい、いいよ」

(自分で考えたような調子である)

T「そう、じゃあ、はじめからしてみようね。いいお話ができたのね」といって最初から、とお話の形にして話してあげた。子どもたちは、だまって耳をかたむけていました。話し終わってからはしばらくして、私はつけ加えました。

「今日はとてもおもしろいお話を先生とみんなで作りましたね、また、つくりましたよねえ」と。

—指導後に—

こうした形のお話づくりは幼児たちにとつて、はじめての経験であり、どの程度についてくるかということが私の気がかりなことでしたが、お話が進行するうちにそんな懸念はすっかりとんでしまいました。

しまいにはむしろ幼児たちの天衣無縫な創作ぶりに、おとなの私たがたじとなつてしまいました。

五歳児の彼らが創造力においても、また、みんなでひとつのものをつくりあげていこうとする協調性においても、お話づくりを可能にする力を十分に持っていることがわかり、私は大変うれしくおもいました。

これからは自信をもって幼児たちの心をたたいてみましょう。ただ人数が大人数だったこと、話の投げかけの部分が少し長すぎたことで、幼児の活躍場面が少なかったことは残念でした。これからは指導方法をくふうして、たのしいお話づくりに発展させていきたいものだとおもいました。

② ひとりでお話をつくる

(五月下旬～翌二月中旬)

私が最初ねらったものはリレー式のお話づくりでしたが、金魚草のお話をきっかけにして、ひとりひとりのお話づくりが盛んになってきました。私は幼児たちの創意を十分にむかえ入れることができるように良い聞きてになろうとおもいました。もちろん時期によって幼児の興味は大きくなったり小さくなったりしましたが、三学期の絵本づくりまで続きました。

作品をいくつかぬきがきしてみましよう。

ちようちようとおはなが、あそんでいました。そうしたらへびとむしがきてちようちようとおはなをいじめました。

そうしたらかぜがふいてきて、むしとへびのめに、はなびらがはりついて、めがみえなくなりました。そうしてむしとへびがちようちようさんごめんなきいねってあやまりました。

五月二三日(共夫)

金魚草のお話づくりの翌々日の朝、私の机の上にこのお話がのせてありました。おかあさんが書きとったものでしたが、おとなの手が入っていないので安心しました。

私は早速他のお友だちに聞かせてあげました。また学級集会の折にお話づくりのねらいや方法などについて、おかあさんたちに説明し、行き過ぎた指導、たとえばおとなの創意を交えたり無理に文字で綴らせるようなことの無いように連絡をしておきました。

ばらさんがびょうきになりました。

ちようちようさんがおみまいにきました。

みつのはこをあげました。

おはなもあげました。

ばらさんは、まくらもとのかびんによろこんできました。

五月二五日 教師が筆記により記録(典子)

これは幼稚園で考えたお話で、絵か紙芝居に表現するようにしてみました。二枚の絵ばなしになり、絵に表現すると話しやすいのでしょうか、自分で大きな声でみんなに話して聞かせるこ

① テレビ、もりのうんどうかい



とができました。

もりのうんどうかい

どうぶつが、あしたはうんどうかいだねとよろこんでいます。もぐらくんもあしたはうんどうかいだねといっています。

よーい どん
はしってキリンくんがいつでもです。
くまちゃんはおちへかえつて、おべんきょうしてねるところです。
みんなゆつくりねています。
九月上旬 教師が筆記により記録(司)夏休み中のことを紙芝居

やテレビ(あき箱と和紙を使い巻絵式にしたもの)につくつてみた時にまたお話づくりが盛んになりました。

これはテレビにつくつたお話です。(写真①参照)

のねずみのあなごもり

のねずみがあなのなかでふるえています。あんまりさむいのでチーズをたべました。でもやっぱりさむいのでスープをつくることにしました。スープのこなをいれました。スープができました。スープをのんだらあたたかくなりました。うさぎさんがとんできました。ねずみさんがあなからかおをだしているの。うさぎさんからはなしをききました。うさぎさんはきつねにおいかけていました。ねずみさんはあなにいれてくれました。ふゆがおわつてはるがきました。さくらはながさきました。

うさぎさんさようなら。

ねずみさんさようなら。

これでねずみさんのおはなしはおしまいです。

(二月中旬) (律子)

わにのぼうけん

あるところにロンというわにがすんでいました。あるひロンがねているとき、にんげんがきてロンをつれていきました。ロンはちかくのみせにうられました。

つぎのひのよる、ロンはにげだして、とおくへどっかに行ってしまいました。ロンはやまをこえ、うみへでました。うみにはボートがうかんでいて、ロンはアフリカにかえりました。

(二月中旬) (一夫)

きょうりゆうくんとかいりゆうくん

きょうりゆうくんと、かいりゆうくんがあそんでました。かくれんぼをしました。すぐに見つかってしまいました。

むこうのほうへ行って見たらくもがでてきました。くもにはなにかがのっていました。かみなりでした。

かみなりはかいりゆうくんと、さらっていききました。

かいりゆうくんは、ふくろをやぶこうとしましたが、やぶけません。

かみなりはおこって、かみなりやまにあめをふらしてしまいました。

あめでビニールのふくろがやぶけて、やつとでられました。

かいりゆうくんは、かぜをよび、かみなりくんをふきとばしてしまいました。

かみなりくんは、にどとかえってきませんでした。

(二月中旬) (好文)

いつもそうですが三学期にはいると、幼児たちの絵本や童話へ

の関心度がいつそう高まるのを感じます。それにお話づくりの経験もたくさんしていますし、そこで今年も絵本づくりをこころめてきてみました。方法は画用紙を二つに折って絵をかき、あとで重ねてとじます。

この三編はその時の作品の中からえらんだものです。

絵本の内容は創作でも模倣でも良いことで出発しましたが、自分自身でとかく考えてつくり出そうとする意欲が、どの子どもにもみられたことは大変たのもしいことでした。私は何だが一年間お話づくりをしてきた目的が、はっきりわかったような気がします。

また、男児のつくったものには、怪獣、戦争、冒険、宇宙などをテーマにしたものが多く、また、女兒のものには、誕生日、お見舞など生活にそくしたもの、花、蝶、お姫さまのお話が多くみられ、もうすでにある性格のちがいがいといったものを感じさせられました。

絵本のお話は友だちに幼児自身でして聞かせたあと録音しておきました。(写真②参照)

―指導後に―

自発的にはじまったひとりでお話をつくる経験でしたが、いろいろな形のものに発展できたことは幸いでした。

なるべくお話単独でなく、絵画表現とむすびつけるようにしま

② 友だちのつくった絵本をみる



したが、まだまだ言語表現力の不十分な幼児にとっては、その方がお話をみんなの前でする時にもやりやすかったようです。

また、子どもたちはつくるのと一緒に友だちの作品を聞くのを大変よろこびました。その話を中心にしておもしろかったところやよくわからないところを質問したりして話し合いの機会をもつこともでき、発表力を育てる良い場面にもなったとおもいます。

③ グループでお話をつくる

十一月中旬

時期が少しさかのぼりますが、今度はグループによるお話つくりについて書いてみようとおもいます。

二学期もなけば過ぎると、そろそろ北風が吹きはじめ、ひなたがこいしくなってきました。

私はひなたほっこをしながらするお話つくりを計画してみました。

今度はもう少し小さいグループにして、十分に幼児たちに発言させ、創意を育てると共に、友だちと一緒にお話をつくるたのしさも知らせたいとおもいました。方法は前と同じであらかじめ幼児の最近の経験をもとにして、お話をいくつか用意し適当な時にいつでも使えるようにしておきました。

ノートを用意しておき、幼児のいったとおり記録しておき、あ

とでまとめて話して聞かせました。

Aグループのお話

大きなかしの木にどんぐりがたくさんありました。ある日のこと風のような風が吹いてきました。どんぐりは落ちないように木の枝にしっかりとつかまっていたのですが、とうとうつかまっていたのがくたびれてしまいました。どんぐりはいちにっさんでとびおりることにしました。

いちにっさん（教師の話。ここでどんぐりに自分の名前をつけることに話し合いました）

ひろむぼうやは野原におちました（ひろむ）。

ゆきぼうやは池に落ちました（ゆきお）。しげぼうやは川岸におちました（しげお）。よしぼうやは幼稚園の庭におちました（よしふみ）。

まゆみちゃんは自動車の上におちりました（まゆみ）。みっちゃんは屋根の上におちりました（みっこ）。かずぼうやは海に落ちました（かずお）。じゅんこちゃんはスクーターの上におちりました（じゅんこ）。みきちゃんは畑の上におちりました（みきひと）。かよちゃんはえんとつの上におちりました（かよ）。

池におちたどんぐりは金魚にたべられました。金魚はまずいといっってはきだしました（ゆきお）。のはらにおちったひろむちゃんは睡にたべられてしまいました（ひろむ）。しげ坊やは川か

らかにがあがってきて、かにのおうちにつれていかれました。かにのぼうやはそれでまりつきをしました（しげお）。よしぼうやは幼稚園の子にひろわれました。ようちえんの子はそれを先生のところへもっていきました。先生はひとりでは淋しいでしょうといっってお部屋のどんぐりの箱に入れてあげました（よしふみ）。

まゆみちゃんは自動車のうんでん手の頭の上におちりました。そうして道路の上におちってつぶれちゃいました（まゆみ）。

やねの上におちたみっちゃんはまちがってねこがたべちゃいました（みっこ）。

海に落ちたかずぼうやは流れて島に着きました。島について坂道の方へころがりました。木にぶつかってしまいました（かずお）。

じゅんこちゃんはスクーターのおじさんが、かしの木にもどしてやりました。ひもでつるしてやりました（じゅんこ）。

みきちゃんは畑におじさんがきてポケットに入れて家にもっていかれました。おうちの子が首飾りをつくりました（みき）。

解説

えんとつの上のかよちゃんは、ねずみにみつけられてしまいました。ねずみはそれを柵の上にかぎりました（かよ）。

どんぐりひろいに行った翌日、朝の保育室で子どもたちが四、五人かたまって話をしていました。私はアンデルセンの五つぶの

③ ゆうぎ発表会の日にお話をする幼児たち



えんどう豆のお話からヒントを得て用意しておいた話を投げかけてみました。僕も私も入ってきた子どもたちを加えて十人になりました。方法は前述のとおりです。このお話は高い木から飛びおりるところからして冒険的であ

り活動力、行動力にとんだ幼児の心にびったりだったせいでしょうか。またどろどろに自分の名前をつけて現実性をもたせたのが良かったのでしょうか、とても活気のある話合いになりました。また十二月のゆうぎ発表会の時には自分のつくった場所を分担で

発表しおかあさん方に聞いていただくこともできました。

(写真③参照)

B グループのお話

花子さんの幼稚園のお庭には大きな汽車があります。赤や水色や黄色で塗ってある汽車です。えんとつもあります。三角や四角や丸い窓もあるとてもすてきな汽車です。

でもね、その汽車はうごかないのです。汽車はいつも「どこかに走っていったらいいなあ」とおもっていました。あるお月さまのきれいな夜でした。汽車はどうとう幼稚園の裏門からぬけ出して、どこかに走って行ってしまいました(教師のお話)。

汽車は山へいきました(かつゆき)。疲れたので休みました。だあれもいなかったのです。淋しくなって帰って、前橋駅にいきました(だい)。

もうすこし時間があるから原っぱに行つてこよう(つかき)。原っぱで遊びました(くみこ)。

原っぱに虫がいました。こおろぎや鈴虫がいました。虫たちは汽車にのって音楽会をしました(つかき)。

「どんな音楽したの？」(教師)

たぬきばやしをしました(だい)。

(歌をうたう)

ぼんおどりをしました(つかき)。

月夜のたんぽをうたいました（つかさ）。

（歌をうたう）

みんなが仲良く遊びました（のりこ）。

お日さまが出てきました（ひろみ）。

汽車はびっくりしていそいで帰りました（えりこ）。

そうしたら幼稚園にも、かぶとやくわがた虫がとんでいました。そうして汽車にとまりました（かつゆき）。

汽車はあわてていたのでさかさの方を向いてとまってしまいました（教師）。

幼稚園の子どもが来てびっくりしました。みんなに笑われたので汽車は横になりました（けいたろう）。

さかさになって機械がこわれたので、かぶと虫に直してもらいました（かつゆき）。

解説

Aのグループのお話を聞いて他の子どもたちもつくりたがりましたので、十人くらいのグループをつくらせてみました。

このグループには、何時も親しんでいる汽車型の遊具をヒントにしたお話を与えてみました。汽車の見えるペランダに椅子を持ち出して、日なたぼっこをしながらつくりました。途中で歌をうたったり結構たのしかったのですが、夜の経験が少ないせいかわ児の空想の範囲がせめられてしまい、汽車はすぐに園の庭に帰

ってくることになってしまいました。そのためにまた途中で私がヒントを与えたりいたしました。幼児の今までの経験をいかせる日曜日のひるまの出来事とか、汽車のみた夢などにした方が、多分もっと発展できたでしょう。

Cグループのお話

今日は日曜日です。太郎ちゃんは、ゆうえん地にあそびにいきました。太郎ちゃんはお猿の新ちゃんのところへいきました。

そうして玉チョコをあげました。新ちゃんはきゃっきゃつといて銀紙をむいてチョコレートをたべました。太郎は新ちゃんと本当にお話がしたくなりました。するとそこに白いひげの、まほうつかいのおじいさんがやってきて、太郎のかたを長い杖でポンとたたきました。そうしたら不思議、不思議、新ちゃんとお話ができるようになりました（教師）。

「もつとチョコレートほしいの」と太郎さんが聞きました。新ちゃんは「もつと」といいました（みわこ）。

新ちゃんが「もつとお友だちがほしいの」といいました（みずき）。「そうだね」って太郎がいったの「どうしたらお友だちがつかれるかね」って太郎がいました（ちづる）。「白いひげをはやした人に聞けばいいね」って太郎がいました（りつこ）。「おじいさんを見つけてくるから、かぎを開けておくれ」と新ちゃんがいきました（みわこ）。太郎さんはかぎをあけて新ちゃんのをつ

いていきました(ひとし)。

おじいさんは他のお猿の所にいきました(じゅんこ)。おじいさんはそこにいたお友だちの肩を杖でたたきました(よしのぶ)。

そうするとお友だちがいっばいになりました。みんなで仲良くあそびました(ひとし)。

解説

Cグループには新ちゃんという、ゆうえん地のお猿をテーマにしたお話を与えてみました。私としては新ちゃんが、まほうの力をもって、太郎といろいろな話し合いをすることを期待していたのですが、新ちゃんはすぐおりの外に出ていき幼児らしい結末となりました。

そして子どもたちの興味は他の二篇にくらべるとずっと低調におもえました。

無理に猿と話をさせようとしたのがいけなかったのでしょうか。幼児期は自由にだれとでも遊んだり話だってできる時代でしたのに、もつともつと猿とすきなことをさせるようになっていけばよかったですとおもいました。

—指導後に—

今回のグループによるお話づくりでは、クラスの大部分の幼児が参加することができ、前よりも、みんなで作るお話のねらいが大分近づくことができよかったと思えました。次にお話つく

りの人数ですが、なるべく少ない方が発言しやすいし、教師がわとしても、みんなの創意をとりあげることができるので十名前後が適当であるとおもいました。

参加したがらない幼児、参加しても発言をしなかった幼児が数名おりましたが、無理をしないようにしました。創造活動にはよろこんで自分から進んでする態度がともなわなにかぎり、本当のものは生まれないうちからおもったからです。でもその幼児たちも段々に興味をもつようになり、三学期にした絵本づくりでは大分おもしろいものをつくることができました。このあと教師のお話ばかりでなく幼児たちのお話をもとにしてつくることもしましたが、これもおもしろいひとつの方法であるとおもいました。

次にグループ毎に投げかけたお話についてですが、投げかけるお話によって幼児たちの興味の深さが、あまりちがうのにおどろきました。

こうしてみると、投げかけるお話の内容と、投げかけ方がお話づくりの発展の上に、大きな役割を占めているということになりそうです。私は、幼児のすきなお話、いいかえれば幼児の心にあったお話とはどんなものかということをもつともつと知らなくてはいけないと思えました。

(群馬大学附属幼稚園)